

教養の文学を適切に授業展開するための方策Ⅱ — 構成の理解から解釈変容へ —

How to improve literary classes for liberal arts: To change the interpretation through understanding the writing structure

* 工藤 真由美

(Mayumi Kudo)

近年の語彙力、読解力の低下した学生が、専門分野としてではなく、教養科目、基礎ゼミとして文学を学ぶ際に、何が重要であるのかという問題意識から、本稿においては荻原浩(1)の『成人式』(2)を学生に読ませ、解釈に必要なながらも欠如している構成の理解を補う前後で、感想文の内容を考察した。その結果、解釈に大きな変容がみられた。このことから教養科目や基礎ゼミとして文学を読むための授業展開として、学生に不足している構成を見抜く力、構成を理解しながら読み進める力を補うことが重要であることがわかる。それにより、一人で読書する際においても作品の魅力をさらに味わい、解釈を深めることにつながる。教養としての文学を学ぶことの意義は大きくになるといえる。

Key words: 構成、起承転結、荻原浩、直木賞

一、問題の所在と本稿の目的

近年、読書に親しむ学生と、年間一冊も読書をしない学生とその志向が極端に分かれる。しかし読書に親しむ習慣のある学生でも、語彙力の不足や読解力の低下は否めない。まして専門として文学を学ぶ学生とは異なり、教養として文学に親しむ科目「教養の文学」や入門的な「基礎ゼミ」を学ぶ学生において、この傾向は顕著で、文章構造を理解して鑑賞するなどは念頭になく、ただ気の向くままに作品を読み進めるのみである。もちろん趣味としての読書は、気ままに読むことに大きな問題は無いのであるが、構成は、作品の魅力を生み出す。すなわち構成の理解は魅力の解釈の深さに一致しているのである。構成とは、効果的な順番で、適切な文章や

場面を組み立てることであり、一つ一つの構成を積み重ねることによって物語は完成する。しかし、構成はただの文章や場面のつなぎ合わせではなく、精緻な計算により魅力的に作品を仕立て上げる仕掛けである。そのような観点から本稿では、学生が興味を示す題材を選び、その作品の構成をどれだけ理解しているか、さらにその構成理解の浅薄が、学生の読解の深さにどれくらいかわるのかについて考察する。

* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

二、授業における観点と実際

学生十六名に小説を読ませ、構成を学んだことがどの程度、解釈の深さに影響するかを検証する。今回この問題を検討するにあたり、対象として選んだ作品は、直木賞作家、萩原浩の短編小説『成人式』である。二十歳前後の学生にとって、より身近なテーマを取り上げることで、自分との乖離が少なく心理解が進みやすいと考えたからである。

本作品は、一人娘の鈴音を十五歳で亡くした夫婦が、悲しみから抜け出せずに過ごす日常から、一通の成人式の着物のダイレクトメールにより、鈴音が生きていれば迎えられたであろう成人式に替え玉出席するという突拍子もない展開となっている。その替え玉成人式により、夫婦の新たな人生の時間の針が動き出していくというものである。

物語の構成である起承転結は、以下の通り。

起

場面1、鈴音の幼稚園の発表会練習、実はそれはビデオの視聴であり、一人娘の鈴

音は五年前、十五歳で死亡していた

場面2、鈴音が十五歳で亡くなる当日の朝

承

場面3、日曜日の朝、三人分の朝食を用意した妻美恵子。原因は成人式の着物のカ

タログ、鈴音宛てのダイレクトメールであった

場面4、テレビコマーシャル、振り袖姿の女の子の姿に神経をとがらせ避ける日々

転

場面5、鈴音との最後の冬の家族旅行ビデオ視聴から、私が思い付きで口にした、

夫婦で鈴音に成りすまして成人式に出席する、替え玉成人式の提案

場面6、妻美恵子の替え玉成人式に向けた決心と、自己の提案でありながらもその無

謀さにおののきつつ、それを受け入れた美恵子とともに進もうとする私

場面7、再び届いた成人式の着物のカタログを今度は真剣に眺め着物選びをする夫婦

場面8、二十歳の鈴音に成りすますための若作りに余念のない美恵子の毎日

場面9、二十歳の鈴音（美恵子）をエスコートするために若作りする私

結

場面10、成人式当日、周りから笑われ白眼視されながらも到着した成人式会場、中

学時代の鈴音の友達との再会、鈴音を亡くして止まっていた夫婦の時間の

針が新たに動き出す予感

三、学生の構成理解と小説の解釈の深化

次に場面構成を学ぶ前後で、学生による小説の解釈に違いがあるかどうかについて、その感想文や質疑応答の分析から探っていくことにする。

構成①起承転結「起」

場面1

「鈴音が笑っている。おひさまみたいな笑顔だ。頭の上には、天使の輪。二つ結びの髪に着けたカチューシャから針金が伸びていて、その先に厚紙で作った金色の輪が揺れているのだ。」

鈴音が歌っている。明後日の幼稚園の発表会で合唱する歌だ。まだ四歳だから、舌足らずで音程もはずれ気味。だいじょうぶ。いまだけだよ。もう少しすれば、お前は歌のうまい子になるから。

鈴音が踊りだす。電池で動く人形みたいに。片手には毛ばたき。本番の時には星野形の飾りがついたスティックを振る。その代わりだ。ソファのウエアに飛び乗って、ぴよんぴよん跳ねながら、劇の中のたった一つのセリフを練習し始める。

『わたしはてんし。あなたのねがいをかないましよう。』同じセリフを飽きもせず繰り返す。可笑しいから間違いを指摘したくなかったのだが、何度めかで私は吹

き出してしまった。あははは。『それかないましようじゃなくてかなえましようじゃないの?』私の言葉に、鈴音は口を縦長に開いた。両手で口を蓋をし、それから目玉をきよろしと真上に動かした。何せまだ四歳。頭の中で考えていることがすつかり丸見えだ。「はっ」と驚き、「しまった」と思い、「はてな」と考えているのだ。一瞬ののちに肉まんの皮みたい目に鼻がクシユッと顔の真ん中に集まる。これは照れ笑い。『まちがいたかなえのれんしゅう。かなえましよう。かなえましよう。かなえー』鈴音が今度は座卓に飛び上がった。『こちら、そこは乗っちゃダメ』三十三歳の私は娘に甘い父親だ。我ながら全く叱る声になっていない。〔3〕

これは作品の冒頭部分である。四歳の鈴音が幼稚園の発表会の練習をしている様子が描かれている。学生はみなこの鈴音が成長し、「成人式」を迎えるまでがこれから描かれるのだと予感しながら読み進めていく。愛情たっぷりの両親に囲まれ育つ鈴音をこれらの描写から感じ取っていく。

ところが次の瞬間、学生は思いもよらない時空へと意識を飛ばされるのである。

「リビングの明かりがついた。ビデオカメラで撮影した録画を眺めている私の背中に、美恵子の声が飛んできた。『まだ起きてるの』慌てて傍らのリモコンを手探りする。音量は小さく絞っていたのだが、それでも音が消えてしまうと部屋はがらんとするような静寂に包まれた。パジャマの上に羽織ったカーデガンの襟をかき合わせて美恵子が言う。『ねえ、もうー』『わかってる』言葉にできなかった美恵子の言葉の続きは、こうだ。『ビデオを見るのはやめようって決めたよね』だ。『ごめん、つい』わかつているのだ。私たち夫婦にとって、見たくはない映像だった。見たくはないのに、見ずにはられない映像だ。

鈴音はもういない。私たちの一人娘は、五年前に亡くなった。十五歳だった。高校に入学する年の三月だ。〔4〕

ここでは、リビングの明かりがつくことで意識の変化、ビデオから現実へと読者である学生の意識を変更させる。この部分で、冒頭の描写はリアルタイムの話で

はなく、ビデオの中の映像だとわかり、しかもそれは十六年も前の出来事であることがわかる。そして畳みかけるように、私と妻美恵子そして鈴音に起きていることを描写していく。

場面2

「その日のことを私は、ビデオ映像のように鮮明に思い出すことができる。何度も何度頭の中で再生し続けているからだ。三月初めの水曜日だった。今にも雪が降りそうな風の冷たい朝だった。〔5〕

この部分の「その日」とは、何を指しているのかわからず、読み進めていく学生。場面1との関係を意識しながらも未知のまま読み進める学生5人(31%)と全く「その日」という文字を気にも留めず、場面1とのつながりを意識しない学生11人(69%)であった。

「時間が不規則な私の会社の始業時間は遅めで、いつもは学校まで歩いて十五分かかる鈴音が先に家を出る。その日の鈴音は洗面所でいつまでもぐずぐずしていた。髪がうまくセットできない、そうばやいて。セットもなにも座敷わらしみたいなおかつば頭だ。どういじったってたいして変わりはないように私には思えた。ほやいている相手はもちろん私ではなく、美恵子だ。私と鈴音は二日前から口をきいていない。部屋から聞こえてくる音楽のボリュームに関して私が小言を言ったのが原因だ。それだけでなく鈴音は「たいていの十五歳の少女がそうだと思いたいが」いつのころからか父親の私とは必要最低限の会話しかなくなっていた。〔6〕

ここではじめて、場面1の最後にある十五歳で亡くなった五年前に時を戻した話、すなわち場面2が15歳当時の鈴音に焦点を当てていることに気付く。

「先に支度を終えていた私は時計を眺めて、美恵子に聞いたさふうな口調で、洗面所の鈴音に聞こえるように声を張る。『だいじょうぶか、遅刻するぞ』そろそ

る仲直りがしたかったのだ。支度が終わっているのにぐずぐずと食後のお茶をすずっているのは、鈴音と一緒に家を出たかったからだ。家から私が乗るバス停までは歩いて二、三分なのだが、その間にひとことふたことでも言葉をかわすつもりだった。

あきらめて玄関に立ち、靴ベラを手を取ったとき、鈴音がようやく現れた。女子学生特有のコートもタイツも身に着けない、いかにも寒そうな格好だ。ただし首にはタータンチェックのマフラーを巻いていた。去年のクリスマスプレゼントに私が贈ったマフラーだ。

父親が年頃の娘にファッションに係る贈り物をするのがいかに危険かは、この二、三年で身に染みていたが、といてぬいぐるみやおもちゃではもう喜んでくれない。美恵子の『そういえばチェックのマフラーを欲しがっていた』という言葉と、鈴音が好きな「緑色」を頼りに何軒もの店を回り、若い店員の言葉に素直に耳を傾けて選び抜いた品だった。包みを開けた時の鈴音の反応はこの一言『ダサ』たぶん今までは一度も使ってはいなかったはずだ。

鈴音が私の顔を見ずに、二日ぶりに声をかけてきた。『行ってきます』マフラーが仲直りの印らしい。私は頬が緩むのをこらえて、照れ隠しのぶつきらぼうな声を出す。『おう。急げ。あと十二分だ』これが鈴音と交わした最後の言葉だ。私が靴を履き終える前にドアを開け、寒空の中に一人で飛び出していった。文字通り、飛んでいってしまった。』(7)

ここで、場面2は鈴音がなくなる当日の朝のことだとわかる。

『あと十二分』学校の始業までの時間のことだ。なぜ、あんなことをいってしまったんだらう。あの日以来私はそればかり考えている。交通事故だった。鈴音は信号のない道路を渡ろうとして、トラックに轢かれた。あの時、急かすような言葉などかけずに、『急ぐと危ないぞ』『車に気をつけろ』と言ってやれなかったことのあるいは照れたりなどせず呼び止めて、『お父さんと途中まで一緒に行こう』そういうわななかったことを、私は繰り返し繰り返し後悔している。今でも夢想してい

る。自分が鈴音と一緒に家を出て、バス停までの道を歩く情景を。『急がないと遅れちゃう』想像の私は、現実の私よりもわかりがいい。『大丈夫だよ。お父さんも昔はしょっちゅう遅刻してた』そして、正門より近いフェンスをよじ登って校庭を駆けた中学校時代の前科を披露する。せりふを変え、シーンを変えて、あらゆる夢想を続けているが、どの結末でも、鈴音は無事でまだこの世にいる。道を渡るのがあと数秒遅ければ、あるいは数秒早ければ、鈴音は助かったのだ。』(8)

ここまでは構成1、起承転結の「起」、物語の幕開けを意味する。これを意識することで学生は「成人式」というこの作品が、悲しみに満ちたものであると、予想したと述べる。15人(93%)

構成②起承転結「承」
場面3

『日曜日の朝、階下に降りると、ダイニングテーブルの上にランチョンマットが三つ敷かれていた。今の私は休日には必ず休む。鈴音が死んだ年に、しばらく休職した後、自ら配置換えを希望した。もう営業職を続ける気力がなかったのだ。』

初めからそうすればよかったのだ。鈴音と過ごす時間ももつととたくさんあったらう。』(9)

ここではいつの日曜日のか唐突に書きだされた文字に戸惑い、その日を探りながら、場面構成を考え読み進めようとした学生8人(50%)、意識せずに読み進めた学生8人(50%)である。

『ランチョンマットの上には三人分の食器と料理が並んでいた。美恵子の顔を見ずに私は言う。『もう、やめたんじやなかったっけ』『だって、じゃがいもが余ってて。使わないと。』スパニッシュ・オムレツは鈴音が好きだったメニューだ。』

鈴音がいなくなった後も、美恵子は三人分の食事を作り続けた。霊前や仏前に備える膳ではなく、本当にきっちり三人前を。』

『いつも三人分作ってたから、分量がわからない』『これは鈴音が好きだったから』あらゆる言い訳を口にして。三か月が過ぎるころに、私は言った。『もうやめにしよう』しばらくは私が朝食を作り、夜は夕食をした。美恵子の心の傷がいえるまで。それからは誕生日やクリスマス、正月だけ、三人で食卓を囲むことにしている。

美恵子が久しぶりに三人分の料理を作った理由が、私にはわかっていて。ジャガイモも卵も関係ない。昨日、送られてきたカタログのせいだ。

手荒く開けられた封筒に目を走らせた。あて先は鈴音になっていた。美恵子が一刻も早く紙くずしようとしていたのは、着物のカタログだった。丸めようとして硬くてうまくいかず、雑巾のように、絞り上げている表紙のページには『成人式』『振袖コレクション』という文字が躍っていた。どこでどうやって調べるのか、着物メーカーが古い個人データをもとに送りつけてきたものだった。〔10〕

ここにきて、この場面3は鈴音が亡くなった直後、三人分の食事を作り続けている美恵子、その頃の日曜日の朝ではなく、五年たった現在のことであることがわかる。

しかし、先述した、冒頭部分がいつの日曜日なのか前後の構成を意識せずに読み進めた学生8人のうち6人（75%、全体の38%）は、この部分の時制関係がうまく整理できず、前後の関係が曖昧であった。そのため以下の描写の「沈黙を何とかしたかった」「過去のなにがしかの記憶の蓋が開いてしまふ、それが怖いのだ。」という私の心情理解ができなかった。場面構成を説明することでようやく理解したが、心情を把握するのに時間を要した。さらに彼らは、以下に見られる、「平均寿命まで生きてしまったとしたら」という表現に違和感を覚えた。生きてしまったとしたらという言葉には、鈴音が十五歳の若さで亡くなったのに、自分たち夫婦だけが平均寿命まで生きながらえてしまうことへの後ろめたさや、鈴音を亡くして生きること何の執着もしない空洞になった親の心情が込められている。場面構成を理解し、前後関係を丁寧に押さえていくことで、6人の学生はようやくこの物語に心底している親の深い悲しみに到達することができた。

「『今日だけ。なんだか急にオムレツが食べたくなって』卵料理が好きではないはずの美恵子がそう言い、いつもの二人だけのひっそりとした食事が始まった。沈黙を何とかしたかったが、言葉が見つからない。

夫婦仲が悪いとは思わないが、私たちの会話は少ない。余計なことを喋り過ぎると、思わぬ時に、過去のなにがしかの記憶の蓋が開いてしまふ。それが怖いのだ。この五年間で美恵子は十歳ぐらい年を取ったように見える。年より若く見られるタイプで、『鈴音と出かけたなら、ご姉妹ですかって言われちゃった』なんて小鼻をふくらませていたのは、もう昔ばなしだ。髪を染めているのは、以前はなかった白髪を隠すためで、それも怠りがちだから、うつむくとつむじのあたりに白いものが見える。

人のことは言えない。そういう私も四十九歳なのに、時々自分が老人であるように思える。生きることに興味が薄れ、体力や気力の衰えに何の危機感も覚えない。平均寿命まで生きてしまったとしたら、私にも美恵子にも、まだまだ嫌になるほどの人生が残っているのだが。〔11〕

場面4

「それまでは気にも留めなかったのに、このところテレビには振り袖姿の女の子が登場するコマーションシャルが増えていることに私たちは気づいてしまった。この間の着物のカタログのせいだ。

晴れ着のCMだけでなく、まだ十一月だというのに、年賀状のCM、年賀状を印刷するプリンターのCM、カメラのCM……。出演しているタレントはたいがい二十歳前後の、鈴音が生きていれば同じ年ごろだろう若い娘だ。見かけるたびにどちらかがテレビを消すのが私たちの習いになっていた。

そのうちテレビそのものを見なくなった。五年前と同じだ。〔12〕

ここまでの描写で、場面4は場面3をきっかけとしての続きの日々が語られていることに気付く。

「そもそも私たち夫婦には自分たちだけが何かを楽しんだり笑ったりするのが罪悪に思っていた。何年もかけて少しずつ笑ったり、趣味に戻ったり、料理をうまいと感じたり、酒に酔ったり、普通にテレビを見たり、そういうことができるようになったのが、また振り出しに戻ってしまった。心の痛みは時間が解決してくれる。よく聞く話だ。その通りかもしれない。だが、解決するのは、いったい何年先なのだろう。」^{〔13〕}

ここまでで場面3、4は少しづつ取り戻しつつあった夫婦の日常を、一通のダイレクトメール、鈴音宛ての成人式の振袖のカタログが娘を失った直後へとまた再び押し戻してしまった「承」の部分にあたることがわかる。

構成③起承転結「転」
場面5

「美恵子が寝息を立てているのを確かめてから、寝室を出た。目覚まし時計のデジタル数字は01・14音を立てないようにして、すぐ隣の鈴音の部屋のドアを開けた。部屋は五年前のままだ。」^{〔14〕}

ここから現在の話題であることがわかる。

「この部屋だけは時が止まっている。壁には中学校の時間割もちゃんと張ってある。失われたのは主の鈴音だけだ。

五年前と変わったところがあるとすれば、本棚の上に二つの収納ケースが置かれていることだろう。蓋の透명한プラスチックケースには、DVDやブルーレイディスクが詰まっている。鈴音が生まれてから十五年までの間に撮った映像を記録したものだ。鈴音が生まれた年のまだビデオカセットに記録していた時代のものもすべてディスクに落としてある。見ないようにしようとしてふたりで約束しておきながら、万一のデータの破損を恐れて、スベアも作っている。私はその中の一枚を抜き出

し、足音を殺して階下へ降りた。デッキにディスクを飲み込ませる。テレビの電源を入れ音がしないうちにポリウムを下げた。

繰り返し見ているから、最初に映るのが、白一色であることを私は知っている。鈴音が中学三年の冬休みに家族でスキーに行った時の映像。三人の最後の家族旅行だ。」^{〔15〕}

ここからは五年前のビデオの中の鈴音と私の描写である。

「場面はリフトで登った先の頂上に切り替わる。頂上といってもゲレンデの中腹の中級者コースの頂上だが、はるか下を眺める時の鈴音の顔は輝いている。私がカメラを向けると、誰の真似なのか、レンズの前に手をかざしていった。『事務所を通してください』ちょっと機嫌が直ってきたようだ。私の声が初めて入る。『ほら、笑って。一たす一は？』鈴音がやれやれという顔で、こういった。『三』

鈴音が滑り降りていく。何度も見返しているからこの後のシーンはよくわかっている。映っているのは、スキー場の青空だ。かっこいい父親の姿を見せたくて、カメラを抱えたまま、片手ストックで鈴音の後を追った私は、途中でああむけに転倒してしまったのだ。遠くで鈴音の笑い声が聞こえる。『もう、お馬鹿あ〜』

よりによって、それが鈴音を映した最後の映像で、鈴音の最後の声だ。指を痛めた私が、カメラを持ってなくなってしまったからだ。

最後の声を聴くために、映像を戻す。ポリウムを少しだけ大きくした。そのせいで、私が座ったソファに近づく足音には気づかなかった。すすり上げる声で、美恵子が来たことが分かった。恥ずかしい行為が見つかってしまったように、私は背筋を棒にし、反射的にリモコンに手を伸ばす。『いいよ、見よう。私もそのつもりで起きてきたんだ』美恵子はありったけのディスクを抱えていた。小脇には鈴音が一番お気に入りだったウサギのぬいぐるみ。涙声で言葉をつづけた。『三人で』

言い終えたとたんに嗚咽した。両手からディスクが零れ落ちて、床に散乱する。美恵子は這いつくばり、目じりをぬぐいながら、ディスクを拾う。涙で震える声で呟く。『一月なんて早く終わっちゃえばいいのに』私は一緒に拾っていた手をやめて

美恵子の背中を撫で、あやすように叩く。自分自身が同じことをしてもらいたい気分だった。座卓の上に移されたぬいぐるみのウサギが、黒いビーズの瞳で私たちをじっと見つめていた。『このままじゃ俺たち、だめだ』私も涙声になっていた。美恵子は四つん這いでうつむいたままディスクを拾い続けている。冷え切った背中
は、鈴音とよく似て、なで肩でほっそりしていた。〔16〕

ここまでと以下の五行の描写には大きな飛躍、場の転換がある。場面5のこの部分
が起承転結の「転」になることが理解されると、この前後で私と美恵子の深く刻
まれた悲しみと、その後の心の変化が深く理解されていく。

「わたしは、ふいに思いついた言葉を口にした。『ねえ、いつそ成人式に出てみ
ない?』美恵子が涙をすすする。『何のために? いやだよ。そんなもの見たくない。』
『違うんだ』私だってよその子どもの晴れがましい姿なんか見たくもなかった。

腹にどす黒くドロリとした感情が溜まってしまふ気がする。『会場を見に行くん
じゃなくて、式に出るんだ』『え?』『替え玉受験つてあるだろ。あれと一緒』
しゃべりだしたら止まらなくなった。どこから言葉を吹き込まれたかのように。

『替え玉成人式。お前が鈴音の代わりに振袖を着るんだ。』美恵子が膝立ちになっ
て、私の額に手を当てた。『正気?』『もちろん。俺も一緒に出る。鈴音のお前をエ
スコートする』『ばかみたい』『成人式って確かフリーパスだっただろ。誰でも中
に入れるはずだ。』『それ、昭和の話でしょ。しかもあなたの田舎の』私の言葉に
驚きすぎて、美恵子は泣くのを忘れてる。そりゃそうだろう。自分でも驚いてい
る。俺は、何を言っているんだろう。前々から考えていたわけじゃない。美恵子の
背中を見ているうちに、誰かにそそのかされたように思いついてしまったのだ。

『わたし、四十五だよ。』『大丈夫。お前なら。』〔17〕

場面6

「六時過ぎに家へ帰ると、美恵子は洗面所から顔を出した。なぜか簡易合羽を着
ていて、セミロングの髪を花びらみたい何か所かに分けて束ねている。両手には

薄手のゴム手袋。よく見ると合羽に見えたのは、穴をあけて被ったゴミ袋だった。
可笑しくなってしまうのかと思った。『何やってる?』『へヤカラー。黒くしよ
うと思って』『黒くするのにも染めるの?』『当り前じゃない。美容院に行く理由を
聞かれたり、止められたりしそうで。だから自分で』『なんで黒に?』『鈴音が今二
十歳だったら、どんな髪にしたかなあって、思って。』

ようやく気付いた。昨日の私の言葉をはやくも実行に移そうとしているのだ。私
のほうは、やっぱり無謀なことに思えて、『ごめん、忘れてくれ』と撤回しようと
思っていたのだが。〔18〕

ここで場面6は場面5の翌日、鈴音のビデオを見ながら大泣きした直後、替え玉
成人式をしようと提案した翌日であることがわかる。しかも美恵子はその無謀な提
案を受け入れていた。すなわち物語が替え玉成人式へ向けて大きく動き出している
ことがわかる。

「『それで黒? 若いんだから、少しは染めるんじゃないかな』『いまの若い子は
むしろ、黒なのよ』『そうなんだ』『長さはこのくらいでいいと思う。』

『そこまで真剣にならなくても』『だめよ。二十歳に見せるなって無理なんだか
ら、せめて振袖を着ても笑われない程度には若作りしなくちゃ』やる気十分だ。

結局自分ではうまく染められず翌日美容院へでかけた。パーマのかかっていた髪
がストレートになっていた『美容院の人にはやめたほうがいいってさんざん言われ
たけど』いや、似合っていると思う。見慣れた妻が別の女性に見えた。〔19〕

場面7

「また成人式の着物のカタログが送られてきた。今度はレンタル店のもの。私たち
はそれを捨てたりはしなかった。ダイニングテーブルに広げて、ページをめくって
いる。成人式に美恵子がーいや鈴音がー着ていく着物を選ぶためだ。

美恵子は算笥の奥にしまっている昔の自分の振袖を着るつもりだったらしいが、
最近になってこう言いだしている。『あれもう大昔の、会社の仕事始めに着ていっ

た時代のだから。着物にも流行があるんだよね。今の子の振袖って、昔とは全然違う』独自に研究を重ねているらしい。将来鈴音が着られるようにとしまっていたはずだが、今鈴音が着たら、きつと拒否されたという。まあ確かに、母親のお古では満足しないだろう。声が聞こえるようだ『ダサ』

『じゃあこの中だったらどれがいい？』⁽²⁰⁾

場面7は場面5、場面6と並んで、さらに替え玉成人式に向けて前進していることがわかる。

「夫婦の会話を取り戻すための遊び半分だった計画が、いつの間にか後戻りできないものになっていった。『正直に言うしかないか。フローラに』美恵子がため息を吐く。フローラは行きつけの美容院の名だ。美恵子のため息は聞きすぎるほど聞いてきたから、私にはわかった。今のため息が、いつもと違って、ちよつと弾んでいくことに。』⁽²¹⁾

場面5、6、7が並列の構造であると理解されていれば、その中に現れる美恵子の心情の変化を読み取ることができる。美恵子のため息がいつもと違って、ちよつと弾んでいるという部分の解釈として、そこに新しい未来に向けてのエネルギーを感じ取るのである。

場面8

「テレビ画面で晴れ着姿の娘が、振袖をはばたかせて飛び跳ねている。美恵子が見ていたドラマの合間のCMだ。美恵子が『あつ』と小さく叫ぶ。

この一か月、美恵子は肌と髪の新若返りに並々ならぬ情熱を注いでいる。少なからず金銭も。洗面台には久しく見かけなかったスキンケア製品が並び、浴室には私が使うのは『厳禁』のシャンプーとトリートメントと石鹸が置かれている。

『今の子のヘアスタイル、見た？』

あのくらいのおとなしい髪形なら、私の年齢でも耐えられるかもしれない。どう？』

『録画しておいて、2時間スペシャルだから、多分またやると思う、あのCM、参考にしたいの』

美恵子が両手を顔の前に差し上げて、自分には操作ができないことをアピールしてくる。手の甲は最も実年齢の出やすい場所だそうで、このところ美恵子は毎晩、ハンドクリームを塗り、手袋をしているのだ。

男の私は二十歳に化けるなんてとうてい不可能だから、道化に徹して、美恵子に向けて視線を逸らす囲になるつもりだったがーやっぱり道化は嫌だ。』⁽²²⁾

場面9

「正月休みの最後の日、私は美容院へ行った。初めて入る店だった。美容院で髪を切ってもらうのは学生時代以来だ。

美恵子があんなに真剣になっているのだ。私の思い付きにすぎりつくみたい。自分だけ安全策を取っていいわけがない。『思いつきり若作りにしてください。色は金色がいいかな』

途中で日和って心変わりしないように目を閉じて眠ることにする。

目が覚めたら自分が別人になっていることを夢見て。』⁽²³⁾

場面8、9ともにさらに準備を整えていく二人が描かれている。場面5、6、7、8、9は起承転結の物語が大きく「転」、構成③の部分である。この理解ができていたのは当初、12人（75%）であったが、整理して場面を俯瞰することで全員が一致した理解に及んだ。

構成④起承転結「結」
場面 10

「『やっぱり、やめよう』美恵子が顔をこわばらせて囁きかけてくる。『えーっ、いまさら、なにさ』私たちはいましがた電車に乗り込んだところだ。座席はあらかた埋まっていたから、ドアの近くに立っている。一月十一日。行先は最寄り駅の三駅先にある、成人式の会場だ。美恵子は青竹色の振袖から腕を伸ばして、私の赤い羽織の裾をひっぱった。『いまなら引き返せる』電車は急行の通過待ちのために停車し続けている。美恵子の足はホームへ戻りたがって草履をばたばた鳴らしていた。怖気づいているのは私も同じだった。車内のそこには暗れ着の娘たちや、スーツを着なれていないことが一日瞭然の若い男たちがいる。『本物』をみた瞬間、自分たちがお互いを慰め合って幻想に溺れていただけの、まがい物であることに気づかされてしまったのだ。』⁽²⁴⁾

一月十一日という文字、ここで、場面10が成人式当日であると気付く。ようやく物語の構成④起承転結の「結」に入ったことが想像できる。そして本当に替え玉成人式という無謀さを実行に移す時が来たのだと読者もワクワクするのである。場面10が成人式当日の様子で、構成④「結」であると理解することのできた学生は14人（88%）であり、心情理解はかなり深くまでできていた。彼らは、以下の描写、「私と美恵子にも成人式が必要なのだ。」という言葉の意味を深く咀嚼することができている。タイトル「成人式」に込められた様々な意味。大人への通過点、そしてここでは悲しみを乗り越えてともに生きていく夫婦の通過点としてである。

「『あーあ、笑われちゃったらどうしよう』美恵子が嘆く。心配に及ばない。もう笑われている。美恵子は気づいていないが、青竹色の肩越しに新成人の男女混合のグループが横目を走らせ、声を殺して笑っているのが、私には見えていた。

『着いちゃった。降りよう』『このまま引き返しましょうよ。そのほうが身のためよ』和服を着ているせいとか、美恵子のセリフは時代がかっている。『いや、予定

通り、いざ決行だ』私も時代錯誤の口調で言い、美恵子の腕を取ってドアのわきの手すりから引きはがした。

今引き返したら、また嘆きと悔恨の日々が始まってしまふ。それを今日で終わりにしたかった。鈴音のためというより、自分たちのためだ。多分、私たちは、同じところを揺られてばかりの悲しみのメーターを、どこかで大きく振り切らねばならないのだ。私と美恵子にも成人式が必要なのだ。』⁽²⁵⁾

以下の内容は、当然ながらすすんだり替え玉成人式が成立しないことと、救済者である鈴音の中学時代の友人の登場である。

「駅から会場の市民文化センターまでの道のりは、市中引き回しに等しかった。前も後ろも横も、着飾った新成人ばかり。私と美恵子は白鳥の群れに紛れ込んでしまったドードー鳥だった。

『ねえ、笑われてるでしょ、私たち』『自意識過剰だよ。自分で思っているほど他人で、人のこと気にしちやあいないんだ』

鈴音の葬式の時には多くの人が泣いてくれた。親戚はもちろん、鈴音の友達や同級生、近隣の人々、私と美恵子の友人も。

だが、五年経ったいまはどうだ。みんな鈴音のことをけろりと忘れて生きている。あたりまえだ。他人なのだから。忘れられずにいるのは私と美恵子だけ。私は唯一同じ悲しみを共有している、すぐ隣を歩く、奇妙な若作りが似合っていると私には思える、四十五歳の乙女の腕を手を取った。『気にするな。他人を自分を映す鏡にしなきゃいいんだ』⁽²⁶⁾

「エントランスを抜けたすぐ正面には検問所のように受付カウンターが据えられていた。足早に素通りしようと思っただけだが、スタッフの一人と目が合ってしまったのがまずかった。『あのーすみません。保護者の方はご入場できませんので』受付のスタッフも新成人の有志なのだろう。新調のスーツを着た細身の若い男だ。私のは真っ赤な胸を張っている。『保護者じゃありません。本人です』

『招待状はお持ちですか』『あ忘れた』『申し訳ありませんが、招待状のない方の入場はご遠慮いただいております。』『お引き取りください』

背後から声が飛んできた『あれ、鈴音の―』色とりどりの着物に身を包んだ女の子三人グループからだった。紫の振袖を着た子が、私たちに目を丸くしている。美恵子が安堵の混じった声を上げた。『ああ、郁美ちゃん』郁美ちゃん。覚えてる。鈴音の中学時代の友人だ。家にもよく遊びに来ていた。だが私が覚えているのは、ころころしていて、キノコみたいなおかつぱ頭だった女の子だ。目の前のはたちの郁美ちゃんはずいぶんスリムになって、アップに結ったオレンジ色のちりちり髪を頭の上で爆発させていた。睫毛は歯ブラシのよう。鈴音はストリートヘヤで黒髪だったに違いない、というのは親の幻想だったかもしれない。『どうしたんですか、そのカッコ?』『それがねー』私たちはとりあえず受付の前から退却することにした。

『そうなんだ。鈴音の代わりに・・・鈴音のこと、思い出せなくて、ごめんなさい・・・うちに早く相談してくれればよかったのに。』見かけは変わっても郁美ちゃんの気立ての良さは変わっていないようだ。美恵子の言葉に涙をすすりあげていた。『ちょっと待って』郁美ちゃんはスマホを手にとって、あの長い爪でどうやってと思う早業でメールだかラインだかをし、それが終わると、今度は何人にも電話を掛けた。いくらしないうちに私たちの周りに、会場のどこかにいた郁美ちゃんの知り合いが集まり始めた。開始時間が迫るころには十人を超えた。郁美ちゃんがみんなから集めた招待状を束にして、どっさりとかウンターに置く。『招待状です。十三人だけ三人忘れてて、十枚』

私と美恵子を真ん中にした集団は、ひと塊になって会場内に突入する。〔27〕

以下は、替え玉成人式後、物語のクライマックスである。

「式が終わり出口へ向かう列に加わった。周囲からの視線はもう気にならなかつた。美恵子もそれは同じだったようで、列が混み合ってから押されると、私の

腕に両手を回してきた。美恵子と腕を組むなんて何年ぶりだろう。五年ぶりどころか、鈴音が一人歩きを始めたころから、揺れる電車に乗ったときぐらいになっていた。『なんだか楽しい。鈴音には申し訳ないけど』美恵子の声は弾んでいる。『俺も。鈴音はきつと文句を言わないよ。俺たちが笑ってたほうが、あの子だって嬉しはずだ。』

鈴音がまだ二歳か三歳だったころ、私たち夫婦は些細なことで喧嘩をし、ダイニングテーブルの向こうとこちらで沈黙をお互いの武器にした冷戦に突入したことがあった。その時鈴音はリビングで読んでいた絵本を放り出して、私の顔を下からのぞき込んで、まだうまくまわらない舌でこう言った。『いちたすいちは?』美恵子の前に行って同じことをした。『いちたすいちは?』カメラで誰かを撮るときの私の決め言葉だ。いつも『はい、チーズ』ではなくこつちを使う。鈴音はそれを覚えていて笑い顔を作る魔法の呪文だと思ひ込んだのだと思う。〔28〕

「ホールの前庭から郁美ちゃんが手を振ってきた。『鈴音ババ、鈴音マ・・・鈴音、一緒に写真撮ろ』桃色の振袖の子が手にしていた紙を広げた。『じゃーん、鈴音のこと、忘れててごめんなさい』A3の紙には鈴音の原寸大の顔があった。五年前の写メールの保存画面をコンビニでプリントして、拡大コピーしたものだそうだ。鈴音は笑っていた。ちよっとぼやけていたけれど、気にはならない。年頃になって私のカメラから逃げるようになると、こんな風にしか写らない写真がやたらに増えたものだ。私は半泣きで、美恵子は大泣きで、十人以上いただろう若い男女にまじってカメラに向かってピースサインをした。

ファインダーの中のものみんなの顔が豆粒ほどになる。豆粒になってしまえば、美恵子の年齢も目立たない。もともと顔立ちが似ているから、美恵子は本当に鈴音になった。十五歳の鈴音と、私たちの鈴音と、その友人たちと、美恵子と、一月の寒空に向けて私は声を張り上げた。『一たす一は?』『えーっ、チーズじゃねえの、という声は無視。もう一度繰り返す。『一たす一は?』そしてはたちになっても、父親からカメラを向けられたら、こう言うに決まっているセリフを、心の中で呟い

た。『三』(29)

四、総括と今後の課題

本稿では、授業を受講している学生に、普段読んでいるように読書させた直後に質疑応答、解釈の確認、場面構成についての補足説明をし、感想の変化を記述させた。それを受けて、場面構成の説明の前後での感想や解釈の変化について考察した。構成とは、効果的な順番で、適切な文章や場面を組み立てることであり、一つの構成を積み重ねることで物語は完成する。しかし、構成はただの文章や場面のつなぎ合わせではなく、精緻な計算により魅力的に作品を仕立て上げる仕掛けである。

普段読書をするときに、作品を解釈するのに場面構成を理解することは、一見必要のないものと思われるが、今回学生の感想に、構成が物語の魅力を下支えしている、普段から物語全体の構成を意識して読み進めることが大事だと気付いた、というものが多数あった。このように書いた学生の感想には物語の本質に触れるような気付きが書かれていた。

以下に二つ紹介する。
まず一つ目。

今回このような構成ということを意識して読むことを初めてやった。そうすると今まで意識したことのないことが見えてきた。萩原浩という人の文のスタイルだ。それは場面を変える時に、頭の書き出しがすぐにそれだとわかるような書き方ではなく、必ずと言っていいほど、読者に時間や場所を考えさせるような「えっ？」と思わせるような文や言葉で始まっていることだ。こんなことに今までは意識も注意もしてこなかった。構成ということを意識したからこそ、こんな深いことが見えてきたと思ひ、楽しくなった。これからも構成に目をやりながら読む癖をつけたい。

次に二つ目。

作者は一つのセリフを何度も繰り返し使っていた。それは効果を狙ったことだと

思う。鈴音との最後の冬の旅行。小さかった鈴音が夫婦げんかの仲なおりをさせようとしたとき。そして最後の成人式の場面。いずれも「一たす一は」「三」仲直りの印。笑顔の印。だから最後の場面で使われているのは、私と美恵子の二人で明るく仲良く生きていくことを表すために使っていると思う。構成は精緻な計算で魅力的に作品を仕上げる仕掛けと授業で習った。この言葉は重要な構成になっていると感じた。

以上のような学生の感想からも、今後、教養として文学を学ぶことにおいて、構成理解などにも目を向けるような働きかけと習慣化を促進することから、読解の深み、解釈の深みを促すことにつなげていくことが課題である。

注

- (1) 萩原浩 第155回直木賞作家 受賞作『海に見える理髪店』集英社 2016年
- (2) 『成人式』前掲『海に見える理髪店』所収
- (3) 同上p193～194
- (4) 同上p196～197
- (5) 同上p197
- (6) 同上p197～198
- (7) 同上p198～199
- (8) 同上p199～200
- (9) 同上p202
- (10) 同上p203～204
- (11) 同上p204～205
- (12) 同上p206～207
- (13) 同上p207
- (14) 同上p207～208
- (15) 同上p208

- (16) 同上 p 2 0 9 ~ 2 1 1
- (17) 同上 p 2 1 1 ~ 2 1 2
- (18) 同上 p 2 1 3
- (19) 同上 p 2 1 3 ~ 2 1 4
- (20) 同上 p 2 1 5
- (21) 同上 p 2 1 7
- (22) 同上 p 2 1 8 ~ 2 1 9
- (23) 同上 p 2 2 0 ~ 2 2 1
- (24) 同上 p 2 2 1
- (25) 同上 p 2 2 3 ~ 2 2 4
- (26) 同上 p 2 2 5
- (27) 同上 p 2 2 6 ~ 2 3 0
- (28) 同上 p 2 3 1 ~ 2 3 2
- (29) 同上 p 2 3 2 ~ 2 3 4

本稿をまとめるにあたり対象となった授業、2019年度「教養の文学」「卒業ゼミ（基礎）」の受講学生に感謝する。彼らの成人式が幸せに満ちたものであることを祈るとともに、その日を迎えることのできなかつたものへの鎮魂として本稿を捧げる。

—2020.10.26 受稿、2020.10.28 受理—